

## 高齢者の非標準的な経験の構造に関する研究

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 大川 一郎

筑波大学心理学系 杉原 一昭

The structure of 'non-normative life events' in elderly people

Ichirou Ohkawa and Kazuaki Sugihara (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan*)

To investigate the structure of 'non-normative life events' in elderly people, an inventory was constructed in order to measure the degree of experience in each of six domains, i. e., life history, life events, current life experiences, health condition, life satisfaction, and "getting old" feeling. It was administered to 61 elderly people of 65 to 75 years old. Factor-analyses yielded three to six factors in each domain with the inventory of non-normative life events containing 27 factors in all. The correlations between factors in each domain were not so high, suggesting that each factor was rather independent.

Key words : non-normative life events, life history, life events, life experience in these days, health condition, life satisfaction, 'getting old' feeling, inventory.

### 目 的

これまでの研究により、高齢者の知的能力の実態(加齢パターン、構造)は、ある程度までは明らかになっており、一定の結論が得られている。しかし、それらの研究は、高齢者の知的能力の一般的特徴を記述、説明しようという観点からの研究である。それ故に、高齢者において、年齢差で説明しえないほどに、知的能力の個人差が大きいのは何故なのかという疑問には答えてくれない。

この疑問に1つの解決を与えてくれるものとして、知的能力にかかわる要因の究明が挙げられると思う。すなわち、知的能力の標準からの逸脱に個人のような要因がかかわってくるのか、また、標準以上に能力を維持していられるのは、個人のような要因がかかわってくるからなのかということの解明が、先の疑問を解決するための1つの糸口となるかもしれない。

ところで、知的能力に限らず、発達において重要であると考えられる要因について、生涯発達の観点から述べている研究にBaltesらがある

(Baltes & Willis, 1977; Baltes, Reese & Lipsitt, 1980)。

Baltesらは、人間の発達に影響を与えるものとして、生体と環境との関連から、①その年齢に標準的な影響要因(Normative Age-Graded Influences) ②その時代に標準的な影響要因(Noramative History-Graded Influences) ③非標準的な経験要因(Non-Normative life events)の3要因をあげている。そして、生体の発達には、これらの要因が、相互に関連し合っているという。

①のその年齢に標準的な影響要因というのは、生物的、環境的なものを含めて、生活年齢と非常に強い関係にあり、その年齢段階にあるほとんどの人が経験するものである。例えば、身体的成熟は、その最たるものである。また、義務教育の経験などもここに含まれる。

②のその時代に標準的な影響要因というのは、ある特定の時代、コホートに生きているほとんどの人が同じように経験するものである。戦争、インフレ、流行などがこれにあたる。

③の非標準的な経験要因というのは、生物面、環

境面において、多くの人が経験するわけではない、また、経験したとしても、その時期、様相が個人によって大きく異なるものである。この例として、転職、転居、疾病、入院、近親者の死などがあげられる。

これらの3要因が、相互に関連し合って、発達に影響を及ぼしていくというわけだが、Baltesらによれば、それぞれが発達に及ぼす影響は、各発達段階において異なるという。そのモデルを Fig. 1 に示す。

この Baltes らのモデルに従うならば、高齢者の知的能力に最も大きな影響を与えるのは、①のその年齢に標準的な影響要因よりも、③の非標準的な経験要因ということになるだろう。先に見たように、非標準的な経験要因とは、誰でもが一樣に経験するわけではない、非常に個人的な経験を意味している。したがって、この非標準的な経験が、知的能力に大きく影響を及ぼすとするならば、年齢差で説明しえないほどに、現実に知的能力の個人差が大きいかも納得できる。これらのことから、この非標準的な経験要因が、高齢者の知的能力の個人差を形づくる一因となっていることが予測される。

これまで、知的能力と関連して、高齢者の非標準的な経験を扱った研究としては、社会経済的地位 (socio-economic status) を扱った研究、健康を扱った研究、性格特性を扱った研究、活動性を扱った研究などがある。これらの研究は、知的能力に影響すると思われる1つの要因をとりあげ、それを詳細に検討しているものである。したがって、これらの研

究は、1つの要因が、知的能力にどのようにかかわってくるのかということの理解には、非常に大きな意義を持つものである。

しかし、知的能力に影響を与えるものとして、また、知的能力の個人差を招くものとして、これらの非標準的な経験要因を考える時、ただ1つの個人的経験をとりあげるだけでなく、もっと総合的な形でこれらの非標準的な経験をとらえる必要があるように思われる。つまり、ある人が、かつて、どのような教育を受け、どのような職業に就き、どのような社会生活をおくり、今、どのような生活をおくっているのか、そして、これまでの生活についてどう考えているのか、という一連の流れの中で、非標準的な経験要因をとらえてみる必要はないだろうか。その上で、どのような要因が、どの程度、知的能力にかかっているのか、どのような要因とのかかわりが薄いのか、などのことについて探っていく。こうすることによって、一層、はっきりとした形で知的能力と非標準的な経験要因とのかかわりが明らかになってくるように思われる。

以上のような観点に立ち、本研究においては、非標準的な経験と高齢者の知的能力のかかわりを検討するのに先立ち、高齢者の非標準的な経験の構造を明らかにすることを目的とする。

さて、本研究においては、まず、非標準的な経験要因を一連の流れ、枠組みの中で、任意に、大きく6つの領域に分ける。すなわち、その人がかつてどのような教育を受け、どのような職業についていたのかという、いわゆる個人の経歴に関する非標準的

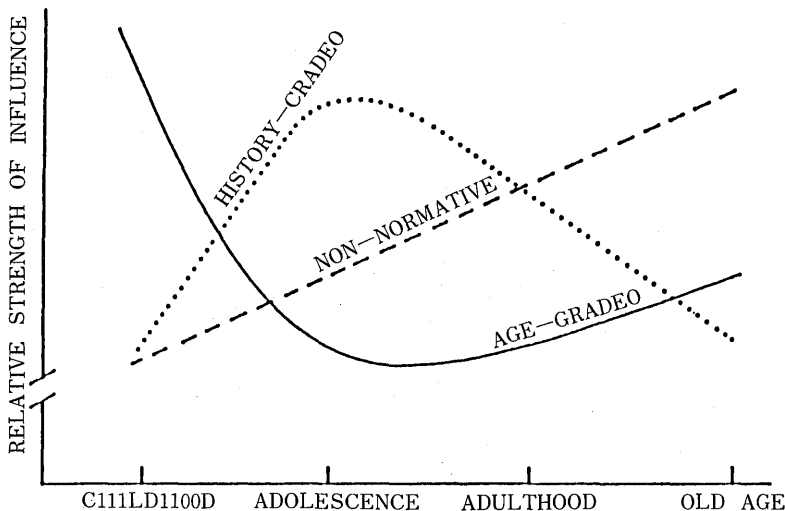


Fig. 1 Baltesらのモデル

な経験要因を中心とした〔個人史〕領域。これまでの、社会生活、家庭生活上の生活経験を中心とした〔ライフ・イベント〕領域。そして、それを受けて、現在、どのような生活を送っているのかという〔現在の生活経験〕領域。また、現在の健康状態はどのようなのかという〔健康状態〕領域。さらに、これらのいわゆる行動面での非標準的な経験をこれまでの人生、生活経験によって醸成されてきた意識面にまで広げて捉え、意識面において両極の位置にあると思われる2領域を設定する。〔生きがい意識〕領域と〔老化意識〕領域である。

以下、それぞれの領域における非標準的な経験の構造を明らかにしていく。

## 方 法

### 被験者

65歳から75歳までの男性 61名。  
平均年齢 70歳5か月 (SD=34か月)。

千葉県下、我孫市、柏市、流山市、松戸市の4市に在住する65歳から75歳の男性に、調査の意図を記した依頼状を郵送し、後に、電話にて協力の可否を確認した。これにより、協力の承諾を得られた〔承諾数116人中69人〕、かつ、実際に協力が得られた人が被験者となった。

### 非標準的な経験要因に関する質問紙(6領域)の構成

先に分けた、非標準的な経験6領域それぞれに属すると思われる経験要因により構成される質問紙が、先行研究等を参考に作成され、用いられた。以下、各領域における質問紙の構成、質問方法等について記す。

#### (1) 〔個人史〕領域に関する質問紙

個人史の領域においては、成育歴、学歴、就職、結婚、家庭等、いわゆる個人の経歴に関する14の経験要因よりなる質問紙を作成した。実施の方法としては、質問項目がかなりのプライベートな部分にまで立ち入るのを考慮して、例えば、「以前の、職業について話していただけますか」等、大きく領域を挙げて質問する形式をとった。そして、それぞれの項目をチェックしていった。

#### (2) 〔ライフ・イベント〕領域に関する質問紙

これまでの社会生活、家庭生活における生活経験を探るために、Holmes & Rahe (1967) によって提唱されたライフ・イベントの概念を用いる。ライフ・

イベントは、個人の生き方に大きな影響を与える経験として捉えられており、元来、社会的適応との関連で研究されてきた。しかし、それらの経験は、知的能力、パーソナリティの面にも影響を及ぼす可能性が大きく、現在、様々な観点からこの概念は見なおされている (Sands, 1981—1982)。本研究では、Holmes & Rahe と谷口ら (1982) のライフ・イベントに関する研究を参考にして、本邦に合わない項目は削除し、また、意味的に重なりが見られる項目を調整し、最終的に36項目よりなる質問紙が作成された。

実施の方法としては、それぞれの項目を読みあげ、各イベントについての経験の有無を質問していった。経験のあるイベントについては、そのイベントの経験が現在の自分にとってどれほど重要であったのかという観点から、5件法により判断を求めた。

#### (3) 〔現在の生活経験〕領域に関する質問紙

現在、どのような社会生活、家庭生活を送っているのかという現在の生活経験について探るために、谷口ら (1982)、杉山 (1984) を参考して、全部で36項目よりなる質問紙を作成した。質問項目としては、現在の仕事、老人クラブ、ゲートボール、趣味のクラブ等のクラブ活動、自治会での活動、TVの視聴、読書、新聞の購読などがある。

#### (4) 〔健康状態〕領域に関する質問紙

健康状態について探るために、大阪府立老人総合センター (1984) により作成された「身体年齢に関する質問紙」を実施した。これは、身体的な衰えの典型的な行動状態を示す13の項目よりなるものである。普段の自分の行動に照らして、賛否法により判断を求めた。

#### (5) 〔生きがい意識〕領域に関する質問紙

個人がそれまでの人生に照らして、自分の人生に対して、どのように満足しているのか、どのように生きがいを感じているのかを探るために、Lowton (1975)、杉山、竹川他 (1981)、古谷野 (1983) を参考にして、全部で27項目よりなる質問紙を作成した。そして、各項目について、自分の意識に照らして、賛否法により判断を求めた。

#### (6) 〔老化意識〕領域に関する質問紙

老化意識を探るために、Cavanら (1959) により示された、「精神の老化的指標」に基づく15項目よりなる質問紙を実施した。これは、Cavanのそれまでの臨床的経験により導き出された指標である。

実施の方法としては、各項目を読み上げ、普段の状態に照らして賛否法により判断を求めた。

### 手続き

1986年7月中旬より9月下旬にかけて、家庭訪問による、1回ないし2回にわたる個別面接がおこなわれ、各質問紙が実施された。質問紙の実施にあたっては、実験者が口頭で質問をおこない、被験者の応答を、逐次、記録用紙に記入していった。

平均面接時間 120分

(SD=35.6 : Min. 70 : Max. 240)。

### 結 果

6領域に分けた非標準的な経験、それぞれの領域における、非標準的な経験要因の構造を検討するために因子分析をおこなった。因子分析をおこなうにあたり、各領域とも、以下の手順に従った。

まず、各質問紙の質問項目間の相関行列を求めた。相関行列の主対角要素に、すべて1.00を用いて、主因子法によって因子を抽出した後、ノーマル・バリマックス法によって因子軸の回転をおこなった。そして、因子の解釈可能性という観点に立ち（柳井、岩坪、1976）、各領域において任意に因子を抽出した。

各因子を構成する項目の決定においては、まず、1つの因子が、他の因子よりも負荷量において、0.15以上大きい項目を、その因子項目として抽出した。0.15以上の差がない項目については、最大の負荷量を示す因子から、負荷量0.15を減じ、その間に含まれる因子のいずれかに入れることにした。この際、最初の段階で抽出された各因子内の項目とのかねあひ、意味の共通性を重点において、その項目が含まれる因子を決定していった。また、各因子の負荷量が、いずれにおいても0.20未満の項目については、因子を決定することが困難なため、対象から除外した。

〔個人史〕領域における、因子分析結果を Table 1 に示す。抽出された5因子で、全分散の60.8%を占めている。因子1は、「6：退職時の役職」、「3：最終学歴」等、個人史におけるキャリアを示す項目により構成されている。したがって、因子1は、「キャリア」と命名した。因子2は、「4：就職」、「8：結婚」と人生における2大イベントを経験した年齢とかかわる因子である。これは、単に、「就職、結婚年齢」と命名した。因子3は、「12：住んでいる家」、「10：配偶者の生死」と夫婦の生活にかかわる因子のように思われる。しかし、2項目でもあるため、単

Table 1. 個人史質問項目の因子分析結果

項目番号	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
6	0.81	0.05	0.12	0.02	-0.11
3	0.77	0.22	0.04	0.13	-0.06
4	0.03	0.67	0.18	0.09	0.18
8	0.32	0.61	-0.10	-0.24	-0.13
12	0.05	0.05	0.86	0.28	0.08
10	0.13	0.02	0.81	-0.15	-0.11
14	-0.40	0.16	0.03	0.72	0.06
1	0.11	-0.32	-0.09	0.59	0.04
7	0.06	-0.34	-0.45	0.31	-0.30
11	-0.13	0.15	-0.19	0.25	0.68
5	0.47	-0.13	-0.01	-0.23	0.64
13	-0.24	-0.13	0.22	-0.06	0.62
9	-0.04	-0.19	0.00	0.15	0.15
2	-0.14	0.12	-0.07	-0.17	0.06

に、「住居、配偶者の生死」と命名した。因子4は、「1：現在、いくつで」、「7：退職してからどれくらい年数がたち」、「14：だれと住んでいるか」という質問項目よりなり、年齢及び退職後の生活とかかわる因子であるように思われる。したがって、因子4は、「年齢、退職後の生活」と命名した。因子5は、「5：職業が安定していたか」、「11：居住地が安定していたか」、「13：現在地に何年住んでいるか」と安定性にかかわる因子であるように思われる。したがって、この因子を「安定性」の因子と命名した。

各因子の独立性、関連性を検討するために、それぞれの項目の標準得点を算出し、各因子ごとに、因子を構成する項目の標準得点を合計し、その合計点により各因子間の相関を求めた。その結果、各因子間の相関は、 $-0.26 \leq r \leq 0.24$ であった。

〔ライフ・イベント〕領域における、因子分析の結果を Table 2 に示す。これら6因子で、全分散の50.2%を占めている。

因子1は、「4：就職」、「9：退職、引退」、「7：配置転換、転勤」等、ほとんどが職業にかかわる経験項目により構成されている。したがって、因子1は、「職業上の経験」と命名した。因子2は、「21：子どもに関する苦勞、トラブル」、「26：子どもの死」、「13：結婚上の苦勞、トラブル」等、家庭におけるマイナスの経験により構成される。また、この因子には、「16：家庭の経済状態良」という経験も含まれており、そのマイナス経験は金銭面によるものではなく、主に人間関係によるものだということが

Table 2. ライフ・イベント質問項目の因子分析結果

項目番号	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
4	0.80	0.11	0.15	0.13	-0.05	-0.06
9	0.77	-0.01	-0.10	0.01	-0.16	-0.05
7	0.60	0.15	0.05	-0.08	0.41	-0.05
6	0.47	-0.15	0.03	0.11	-0.03	0.46
29	0.44	0.13	0.17	0.28	-0.08	0.12
5	0.40	0.21	0.19	0.34	0.27	0.31
8	0.34	0.02	-0.04	-0.22	-0.05	-0.46
21	-0.12	0.65	-0.02	0.27	0.00	0.00
26	0.01	0.60	-0.16	-0.19	-0.11	0.08
16	0.32	0.55	0.29	-0.15	0.20	0.09
13	0.19	0.48	-0.10	-0.06	0.06	-0.03
23	-0.31	0.42	0.06	0.25	0.17	-0.25
24	-0.17	-0.06	0.80	-0.03	-0.11	-0.27
20	0.27	0.04	0.67	0.12	-0.11	-0.33
19	0.05	0.34	0.59	0.03	-0.24	0.13
12	0.12	0.18	0.31	0.31	0.22	0.44
35	-0.10	0.19	-0.41	0.09	-0.11	0.01
2	0.19	0.01	-0.14	0.82	-0.08	0.11
27	0.02	0.29	-0.08	0.46	0.13	-0.31
33	0.30	0.47	0.17	0.34	0.20	-0.06
3	0.02	0.22	-0.02	-0.81	0.13	-0.11
14	0.04	0.18	0.18	-0.03	0.81	0.00
36	-0.07	-0.12	-0.08	-0.01	0.34	0.18
15	0.08	-0.03	0.14	0.02	-0.76	0.11
1	0.00	0.05	-0.47	0.03	-0.36	-0.15
28	0.15	0.09	-0.19	0.05	0.16	0.54
32	0.05	0.42	0.25	-0.10	-0.21	0.38
30	0.10	0.02	0.13	0.06	0.08	-0.61

成される。ただ、「36：戦争」経験も含まれており、意味的には、この2つに分かれる。そこで、無理に1つにまとめることはせず、「夫婦の健康、戦争」と命名した。因子6は、「28：親の人生上の失敗、トラブル」、「32：親しい友人の死」、「30：友人、知人とのよい関係(-)」という、親、友人とのマイナス経験により構成されている。したがって、この因子は、

Table 3. 現在の生活経験質問項目の因子分析結果

項目番号	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
24	0.81	-0.25	0.14	-0.11	0.12	0.35
26	0.77	-0.08	0.26	0.11	0.02	-0.01
27	0.75	-0.17	-0.10	-0.10	0.05	0.04
25	0.74	0.02	0.05	-0.15	-0.04	0.26
30	0.56	-0.18	0.26	-0.05	-0.27	-0.05
28	0.49	-0.06	-0.13	-0.08	0.08	0.64
32	0.40	-0.05	0.12	0.44	0.32	0.16
3	-0.04	0.83	-0.03	0.04	0.09	-0.08
2	0.02	0.81	0.00	0.05	0.03	-0.05
7	-0.09	0.78	0.01	0.01	0.02	-0.13
6	-0.20	0.78	-0.08	0.07	-0.03	-0.19
35	0.22	-0.03	0.75	-0.09	-0.05	0.19
36	0.24	0.00	0.74	-0.05	0.01	-0.08
31	-0.05	-0.00	0.65	-0.02	-0.06	-0.09
33	-0.08	-0.03	0.60	0.33	0.35	0.01
34	0.36	0.06	0.44	-0.16	0.05	0.23
23	-0.06	-0.11	-0.03	0.80	-0.00	-0.15
16	-0.24	-0.05	0.10	0.76	-0.17	-0.06
20	-0.04	0.04	-0.39	0.64	-0.00	-0.21
18	-0.37	0.08	0.40	0.50	-0.05	0.12
19	-0.40	0.00	-0.09	0.49	-0.15	-0.08
4	0.17	-0.33	0.02	0.25	0.01	0.04
17	0.12	0.07	0.20	0.24	0.29	0.03
12	0.03	0.21	-0.16	-0.08	0.86	-0.03
13	0.08	0.14	-0.12	-0.20	0.85	-0.05
15	0.09	-0.39	0.29	-0.19	0.57	-0.06
14	0.01	-0.25	0.32	-0.10	0.46	-0.03
9	-0.25	-0.19	0.20	-0.38	0.25	0.21
8	-0.14	-0.17	0.26	-0.30	0.20	0.11
11	-0.05	0.01	0.01	-0.15	0.13	0.85
10	0.28	-0.01	0.04	-0.08	-0.04	0.78
1	-0.21	-0.17	0.16	-0.16	-0.16	0.40
21	0.17	-0.10	0.15	0.02	-0.27	0.33
22	0.28	-0.19	-0.12	-0.16	-0.39	0.30
5	0.09	-0.16	-0.03	0.01	-0.08	0.28
29	0.18	-0.17	-0.10	-0.02	-0.13	-0.11

考えられる。そこで、因子2を、「家庭上のマイナス経験(親子間、夫婦間)」と命名した。因子3は、「24：子どもとの関係良」、「20：子どもに関する恵まれた体験」、「12：結婚上の恵まれた体験」等、第2因子とは、正反対に、家庭におけるプラスの経験により構成される。したがって、この因子を「家庭上のプラス経験(親子間、夫婦間)」と命名した。因子4は、「2：恵まれた教育環境」、「27：親の人生上の成功」「3：教育環境不十分(-)」等、豊かな養育環境を予測させる経験により構成されている。したがって、因子4は、「養育環境にかかわるプラス経験」と命名した。因子5は、「14：配偶者の健康」、「1：重い病気にかかる(-)」、「15：配偶者の重い病気(-)」等、夫婦の健康にかかわる経験項目により構

「親、友人にかかわるマイナス経験」と命名した。

なお、各因子間の相関は、 $.03 \leq r \leq .38$ であった。

〔現在の生活経験〕領域における因子分析の結果を Table 3 に示す。これら 6 因子で、全分散の 54.7% を占めている。

因子 1 は、「24：本への関心」、「特定のジャンル（26：フィクション、27：ノン・フィクション、28：趣味）への興味」、「25：読書量」、「30：雑誌の購読」等、読書にかかわる経験項目により構成されている。したがって、因子 1 は、「読書」因子と命名した。因子 2 は、「2：老人クラブでの活動」、「3：そこでの役員」、「6：ゲートボール活動」、「7：そこでの役員」と老人クラブとゲートボールでの活動項目により構成されている。そこで、この因子を、「老人クラブ、ゲートボール」因子と命名した。因子 3 は、「31：新聞を読む時間」、「特定の新聞欄への関心（35：論説面、36：家庭面、33：社会面、34：政治面）」等、新聞にかかわる項目により構成されている。したがって、因子 3 は、「新聞」因子と命名した。因子 4 は、「16：TV の視聴時間」、「特定の TV 番組への関心（23：連続ドラマ、20：洋画・邦画、18：スポーツ）」等、大部分は、TV に関する項目により構成されている。そこで、この因子を、「TV」因子と命名した。因子 5 は、「12：親睦会での活動」、「13：そこでの役員」、「14：自治会での活動」、「15：そこでの役員」、「8：体育系クラブでの活動」、「9：そこでの役員」等、かなり活動性の高い団体（あつまり）における活動と関連する項目により構成されている。したがって、この因子は、「活動性の高い団体」因子と命名した。因子 6 は、「10：文科系クラブでの活動」、「11：そこでの役員」、「5：老人大学役員」、「22：教育番組、21：ドキュメントという特定の TV 番組への関心」、「1：現在の就労」という項目により構成されており、文科系的なものへの関心、働きかけがうかがえる。そこで、第 6 因子は、「文科系的な活動」因子と命名した。

なお、各因子間の相関は、 $-.29 \leq r \leq .35$ であった。

〔健康状態〕領域における因子分析の結果を Table 4 に示す。これら 3 因子で、全分散の 50.7% を占めている。

因子 1 は、「3：長時間歩いても大丈夫か」、「2：普通に歩く場合はどうか」、「8：電車、バスですくと立っていても大丈夫か」、「6：段階の昇降はきつくないか」、等、脚力の衰えに関連した項目により構成される。したがって、因子 1 は、「脚力」因子と命名した。因子 2 は、「10：外出が大儀かどうか」、「9：動くことが大儀かどうか」、「13 疲れやすいか」、「14：

Table 4. 健康状態質問項目の因子分析結果

項目番号	因子 1	因子 2	因子 3
3	0.87	0.04	0.08
2	0.87	0.01	0.14
4	0.68	0.37	-0.02
8	0.61	0.18	-0.14
6	0.60	0.04	0.22
10	-0.19	0.69	-0.22
9	0.15	0.69	0.24
12	0.07	0.62	0.08
13	0.30	0.50	0.12
14	0.12	0.43	0.08
11	-0.19	0.06	0.78
5	0.33	0.09	0.67
7	0.27	0.47	0.53

横になっていることが多いか」等、活動性にかかわる項目によって構成される。そこで、この因子は、「活動性」の因子と命名した。因子 3 は、「11：身体の関節が固くなっていないか」、「5：急ぐ時には、走りだすか」、「7：とっさの動きがぶくなくなっているか」等、とっさの動き、機敏性にかかわる因子により構成されている。したがって、第 3 因子は、「機敏性」の因子と命名した。

なお、各因子間の相関は、 $.30 \leq r \leq .32$ であった。

〔生きがい意識〕領域における因子分析の結果を Table 5 に示す。これらの 4 つの因子で、全分散の 48.6% を占めている。

因子 1 は、「12：若い時と同じように幸福」、「14：自分の人生に満足」、「7：自分の人生は恵まれていた」と自分のこれまでの人生に満足すると同時に、「4：さびしさは感じない」、「22：遠出はおっくうではない」、「26：自分に自信がある」等、現在の生活に対しても、自信を持ち、積極的に活動している様子がうかがえる項目により構成されている。そこで、因子 1 は、積極的な現在の生活を伴っているという意味で、「能動的満足感」と命名した。因子 2 は、「21：これまでに求めていたことのほとんどを実現した」、「27：自分のやるべきことをやってきた」、「8：年をとっても役にたっている」等、人生に対するの充足感が感じられる項目により構成される。したがって、因子 2 は、「充足感」因子と命名した。因子 3 は、「3：今の生活に不幸せなことはない」、「23：お金のことで心配することはない」、「10：年をとるのは良いこと」等、因子 1 と同じように、人生に対する満足感

Table 5. 行きがたい意識質問項目の  
因子分析結果

項目 番号	因子1	因子2	因子3	因子4
12	0.74	0.06	0.40	0.02
4	0.69	0.09	0.06	-0.09
22	0.63	0.25	-0.07	-0.22
6	0.55	-0.09	0.02	0.15
26	0.52	0.37	0.02	0.17
14	0.50	0.40	0.17	0.25
20	0.48	-0.30	-0.05	0.16
7	0.35	0.44	0.14	0.15
2	-0.03	0.68	0.38	-0.09
21	-0.19	0.65	-0.11	0.12
8	0.13	0.65	-0.05	0.06
27	0.18	0.55	0.09	-0.08
3	0.31	0.03	0.72	0.16
23	-0.10	0.17	0.70	0.28
10	0.04	0.02	0.61	0.06
25	0.35	0.36	0.59	-0.14
19	0.16	-0.06	-0.02	0.77
5	0.41	0.00	0.02	0.72
9	-0.11	-0.02	0.39	0.60
17	-0.17	0.33	-0.07	0.56
16	0.02	0.05	-0.08	0.11

がうかがえる項目により構成されている。しかし、因子1とは異なり、現在の積極的生活に通じる項目は含まれてはいない。そこで、因子3を積極的な現在の生活は伴っていないが、人生には満足しているという意味で、「受動的満足感」と命名した。因子4は、「19：物事をいつも深刻に考えるほうではない」、「5：小さいことは気にしない」、「9：心配事があっても眠れないことはない」等、かなり人生を楽天的に捉えていると感じられる項目により構成されている。そこで、因子4は、「楽天性」の因子と命名した。なお、各因子間の相関は、 $0.09 \leq r \leq 0.36$ であった。

[老化意識]領域における因子分析の結果をTable 6に示す。これらの3つの因子で、全分散の38.7%を占めている。

因子1は「4：昔のことをよくしゃべる」、「13：昔の苦勞話をよくする」と、過去を振り返り、懐かしむ一方で、現実とのギャップの中で「5：ぐちっぽく」、「12：自分の感情の動きに敏感」になっていると解釈される項目により構成される。そこで、因子1は、「過去回帰的」因子と命名した。因子2は、

Table 6. 老化意識質問項目の  
因子分析結果

項目 番号	因子1	因子2	因子3
4	0.77	-0.05	0.06
13	0.62	-0.08	0.12
5	0.50	0.12	0.15
12	0.45	0.23	0.04
9	0.09	0.67	0.04
8	-0.04	0.65	0.08
3	0.37	0.51	-0.12
11	0.28	0.42	0.26
1	0.33	0.42	0.34
6	-0.36	0.19	0.65
15	0.19	-0.49	0.52
10	0.33	0.02	0.52
2	0.15	0.18	0.48
14	0.30	0.11	0.45
7	0.00	-0.26	0.41

「9：騒々しいとイライラする」、「8：新しいことを覚えるににくい」、「3：わがままになった」、「11：社会の変化に疑い深い」等、現実のことに對し懐疑的になっていると解釈される項目により構成されている。したがって、因子2は、「現在懐疑的」因子と命名した。因子3は、「6：目の前で言われたり、されたりすることが気にならない」、「10：他人とのつきあいがおっくう」、「7：一人でいたい」、「14：計画の変更が困難」等、自分の中に閉じこもり、外との接触を避けたがっている様子のがうかがえる項目により構成される。したがって、因子3は、「自己閉鎖的」因子と命名した。なお、各因子間の相関は、 $0.15 \leq r \leq 0.24$ であった。

## 考 察

本研究の目的は、知的能力と非標準的な経験とのかわりを検討するのに先立ち、非標準的な経験の構造を明らかにすることであった。

本研究では、高齢者の非標準的な経験要因を、一連の流れ、枠組みの中で任意に大きく6つの領域に分けた。すなわち、その人の職業、学歴、居住など、いわゆる個人のそれまでの経歴にかかわる「個人史」領域、これまでの社会生活、家庭生活上の生活経験を中心とした「ライフ・イベント」領域、その人の現在の生活を中心とした「現在の生活経験」領域、身体的な衰えを中心とした「健康状態」領域、また、

意識面においては、生きがい、幸福感とかかわる「生きがい意識」領域、老いの自覚とかかわる「老化意識」領域である。

本研究の結果、「個人史」領域は3因子、「ライフ・イベント」領域は6因子、「現在の生活経験」領域は6因子、「健康状態」領域は3因子、「生きがい意識」領域は4因子、「老化意識」領域は3因子によりそれぞれ構成されることが明らかになった。各因子の命名については、結果でも述べたが、それらをまとめたものがTable 7である。6領域にわたる非標準的な経験は、そこに示されるような内容を持つ27の因子により構成される。

各領域における因子間の相関については、互いに有意な相関を示す因子はあったが、相関係数は、 $-0.29 \leq r \leq 0.38$ の間であった。この数値は、各因子を構成する項目の数を考慮すると、それほど高い数値ではなく、むしろ、各領域における因子の独立性をある一定程度保証する数値であるように思われる。

ところで、非標準的な経験をどのような領域からとらえるか、また、その領域に含める経験要因として何を考えるか、等の違いより、当然、非標準的な経験の構造は、本研究の結果とは、異なってくるものが予測される。しかし、非標準的な経験に焦点をあて、それを総合的にあつかった研究は、これまでほとんどみられず、この種の研究は、緒についたばかりだといってもいい。したがって、現段階では、どのような意図で、どのように非標準的な経験を分類し、どのような非標準的な経験要因をとりあげたかということを確認したうえで、この種の研究をおこなうことが重要になってくるように思える。そして、それらの研究の蓄積により、はじめて安定した形で、非標準的な経験の構造も明らかになってこよう。

## 要 約

本研究の目的は、高齢者の非標準的な経験の構造を明らかにすることであった。

非標準的な経験を人生の一連の流れ、枠組みのなかで任意に6つの領域に分けた。そして、それぞれの領域での経験を問う質問紙を作成し、高齢者に対して調査を実施した。因子分析の結果、[個人史]領域においては5因子、[ライフ・イベント]領域においては6因子、[現在の生活経験]領域においては6因子、[健康状態]領域は3因子、[生きがい意識]領域は4因子、[老化意識]領域は3因子が抽出された。つまり、本研究における非標準的な経験は、こ

Table 7. 6領域における各因子の命名

### [個人史]

- 因子1 キャリア (学歴, 役職)
- 因子2 就職, 結婚年齢
- 因子3 住居, 配偶者の生死
- 因子4 年齢, 退職後の生活 (引退年数, 同居人数)
- 因子5 安定性 (定住制, 定職性)

### [ライフ・イベント]

- 因子1 職業上の経験 (配置転換, トラブル, 成功)
- 因子2 家庭上のマイナス経験 (親子間, 夫婦間)
- 因子3 家庭上のプラス経験 (親子間, 夫婦間)
- 因子4 養育環境にかかわるプラス経験
- 因子5 夫婦の健康, 戦争
- 因子6 親, 友人にかかわるマイナス経験

### [現在の生活経験]

- 因子1 読書
- 因子2 老人クラブ, ゲートボール
- 因子3 新聞
- 因子4 TV
- 因子5 活動性の高い団体
- 因子6 文科系的な活動

### [健康状態]

- 因子1 脚力 (長時間歩行, 階段の昇降, 電車, バスでの着座)
- 因子2 活動性 (外出の大儀性, 疲れやすさ)
- 因子3 機敏性 (関節の柔らかさ, 瞬間的動き)

### [生きがい意識]

- 因子1 能動的満足感 (伴う積極的現在生活)
- 因子2 充足感
- 因子3 受動的満足感 (積極的な現在生活の欠如)
- 因子4 楽天性

### [老化意識]

- 因子1 過去回帰的 (昔の苦勞話, ぐち)
- 因子2 現在懐疑的 (イライラ, わがまま, 疑心)
- 因子3 自己閉鎖的 (鈍麻, 一人でいたい)

れら6領域、27の経験要因により構成されることが明らかになった。また、因子間の相関も低く、その独立性についても一定程度の水準を有していた。

しかし、この非標準的な経験の構造は、その領域の捉えかた、また、それぞれの領域に含める経験要因として何を考える等の違いより、本研究の結果とは、異なってくるものが予想される。したがって、その結果の解釈においても、本研究において捉えら



れた非標準的な経験の構造，という限定を伴うものであることに注意する必要がある。

### 引用文献

- Baltes, P. B., Reese, H. W., & Lipsitt, L. P. 1980 Life-span developmental Psychology. *Annual Review of Psychology*, **31**, 65-110.
- Baltes, P. B., & Willis, S. L. 1977 Toward psychological theories of aging and development. In Birren, J. E., & Schaie, K. W. (Eds.) *Handbook of the Psychology of aging*. Van Norstrand Reinhold.
- Cavan, R. S., Burgess, E. W., Havighust, R. J., et al 1959 Personal adjustment in old age. Science Research Associates.
- Holmes, T. H., & Rahe, R. H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **11**, 213-218.
- 古谷野亘 1983 モラールスケール，生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連性 老年社会科学, **5**, 129-142.
- Lowton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: Revision. *Journal of Gerontology*, **30**, 85-89.
- 大阪府立老人総合センター編 1984 21世紀への老年学 ミネルヴァ書房
- Sands, J. D. 1981 The relationship of stressful life events to intellectual functioning in women over 65. *International Journal of Aging and Human Development*, **14**, 1981-1982.
- 杉山善朗 1984 向老期から高齢期にわたる心理・社会的変動 心理学評論 **27**, 317-330
- 杉山善朗, 竹川忠夫他 1981 老人の「生きがい」意識の測定尺度としての日本版 PGM の作成(1) 老年社会科学 **3**.
- 谷口幸一, 大塚俊夫他 1982 高年者のパーソナリティーに及ぼすライフ・イベントの影響 老年社会科学 **4**.
- 柳井晴夫, 岩坪秀一 1976 複雑さに挑む科学 講談社